

(森達也『いのちの食べ方』理論社より)  
忘れられない記憶—伝説の職人—

(略) その日に紹介されたのは、もう数年前に退職したOBだった。でもただのOBではない。戦前から芝浦と場に勤めていた彼は、退職した今も、大勢の職員たちから一目置かれる、「伝説の」と場労働者だ。

なぜ伝説か?ととにかく牛や豚を解体するその手際が、圧倒的に早くて正確なのだ。おまけに誰もか認める人格者だ。僕も名前だけは知っていた。その「伝説の職人」と酒を飲んだ。無口な人だ。もう七十近い年齢のはずだけど、肩や腕を動かすたびに、シャツの下の筋肉は今も、もくもくと盛り上がる。昔の話をお聞かせくださいと僕が言えば、あんたが聞いて面白い話なんて何もないよと素気なく答える。でもお願いしますと何度か頼んだら、そういえばこんなことがあったなあと、ぼつりぼつりと彼は話始めた。

戦後間もなくして豚や牛なんてほとんどいない頃、大きな山羊がと場に連れてこられたことがある。山羊のと畜など、誰もこれまで経験がなく、命じられた彼は、ハンマーで眉間を殴ったが、豚なら気を失うはずなのに山羊は倒れない。あわてて何度も殴ったが、山羊は血だらけになりながら、やはり倒れない。最後には仕方なく、ナイフでと止めを刺したという。

これだけの話を語りながら彼は、「あの山羊には本当に申し訳ないことをした」と何度もくりかえした。日焼けした目許には、いつのまにかうっすらと涙が滲んでいた。



# いのちの食べ方

**合 掌**

● 尊ととしおめぐみぐみにより、おごいんぐいただき  
ました。(今回の時回会者発言)

● おかげで、御馳走ごちそうをいただきました。

● 御馳走ごちそうを恵めぐまれました。(今回の時回会者発言)

● 深くふかい恩おんを蒙まり、ありがたうございました。

もう半世紀も前の話なのに、一匹の山羊を苦しめて殺してしまったことで、彼は今もこれほどに苦しんでいる。

僕らが肉を食べるためには、誰かが殺さなくてはならない。彼らは僕らの代わりに殺すのだ。「穢れ」とか、「被差別階級」とかそんな理由を言い訳にして、僕らはと場から目をそむけ続けてきた。その結果、彼らも仕事を隠さなくてはならなくなった。



ひとりの職人がしみじみと打ち明けてくれたことがある。

「子どもの学校の宿題が、『お父さんの職業』についての作文だと聞いたとき、自分は本当につらい思いをした。でも子どもは違った。作文を後から読んだ。『肉を作るお父さんの仕事は、とても大切です。だから僕はお父さんが大好きです』と書いてくれた。嬉しかった。涙が出た。この仕事をやってきてよかったと今は思っている。」

## 僕たちが生きているということ

(略) 僕たちは肉を食べる。つまり生きていた動物たちを食べるということだ。だから、彼らを殺しているのは僕たちなんだ。もしもそれが嫌ならば、ベジタリアンになることだ。でも植物だって、じつは、いのちであることに変わりはない。僕らは生きるために、ほかの「いのち」を犠牲にするしかない。「いのち」はそのように生まれついた。僕たちばそうやってほかの「いのち」を犠牲にしながら、おいしいものを食べ、暖かい家に住み、快適で便利な生活を目指してきた。

その営みを僕は否定する気はない。でもならば、せめてほかの「いのち」を犠牲にしていることを、僕らはもっと知るべきだ。どうやって知ればよいか? しっかりと見るだけだ。目をそむけずに見るだけで、あるいはきちんと見ようとする気持ちを持つだけで、きっと僕たちは、いろんなことを知ることができるはずだ。

※食中毒防止のため、早めにお召上がり下さい。  
西教寺進徳仏教婦人会  
私たちといっしょにお聴聞しましょう